

STEP UP NEUROLOGY IN HOKKAIDO



北海道大学動物医療センター
内科専科（神経内科重点）研修

脳神経内科のすすめ

神経は苦手という獣医師の方が多いと思います。

それもそのはずで、脳神経内科の対象臓器（脳・脊髄・末梢神経・筋肉）は複雑で、カバーする疾患はやたらと多く、診察手技も複雑で時間を要します。知識と理論なく挑むと全く上手くいきません。神経診療をしっかり行うためには、神経の知識、診察手技、丁寧な病歴聴取が必要で、それらを繋ぐ臨床的思考力を要します。強力で高額なMRI検査を行えば全て診断が付くという単純な診断学ではないのです。

それでも、一度知識が入り理論が身につくと、複雑さの中にある神経系のロジックが見えてきます。神経徴候が雄弁に神経疾患を指し示す神経診療の醍醐味がここにあります。難しいからこそ、獣医師の力量がはっきり分かれる領域が神経診療なのです。

神経診療を身につけるためにはどうするか？

確かな指導医の下で、症例と真摯に向き合う臨床現場でしか身につきません。神経徴候を正しい解像度で認識し言語化すること、神経学的検査から病変推定すること、病歴を踏まえて順序よく鑑別診断を挙げること、鑑別診断を絞る検査と伴うリスクを正しく把握し経済面を踏まえて提示すること、MRI検査・脳脊髄液検査・特殊検査で診断に迫ること、飼い主さんに正しく理解してもらうために説明を尽くすこと。日々の診療が学びに繋がります。

簡単でも効率的でもありませんが、当科での経験は神経診療に限らず、臨床獣医師にとって必ず役立つものと思います。



神経内科重点研修のその後（出口戦略）は？

神経が大好きになれば神経を極めるがよいと思います。大学院生、大学教員、専門医、様々なキャリアアップの選択肢があります。神経病は典型例から稀少例まで奥が深く、分かっていない領域に遭遇することもあり、人生をかけるに値します。

極める程ではないけれど、神経が分かるようになった方は、どの現場でも楽しく仕事ができ、重宝されるでしょう。典型例を確実に診断できる力、重篤例を見逃さない洞察力、二次病院に適切に紹介できる力はかかりつけ医にとって重要な能力です。

神経内科重点研修は神経が苦手な人から神経を極めたい人までを広く対象としています。自身の目標と習熟状況に合わせて診療に取り組み、知識と診療技術、考える力を成長できる機会を提供します。興味のある方はまずお問い合わせください。



内科専科（神経内科重点）研修

- ・脳神経内科の診療がある診療日は神経症例を担当し、それ以外の診療日には内科症例を担当することで重点化とする。

【月・火・木】 神経の初診
【水・金】 内科の初診

1人あたり週に3件、年間100件の経験

(2025年現在)

- ・応募資格は内科専科と同様で、原則として1年以上の伴侶動物診療の経験を有する方。したがって、全科研修修了からの内部移行もしくは経験者。

目標に合わせた研修レベル設定

- ・研修プログラムとしては1～5年程度。自ら目指す達成度に合わせて、研修期間は変動する。
- ・研修医の習熟度により初期研修、専門研修、上級研修とレベルを上げる。期間は目安であり、成長段階に応じて研修レベルを上げていく。実質的な診療内容は変わらないが、主体性を徐々に上げる。半期に1度程度面談し、進捗状況と課題、その時点での研修レベルを設定する。



神経の苦手を克服したい
神経がある程度できるようになりたい
神経病でやっていきたい

- ▶ 初期研修 ± 専門研修
- ▶ 初期研修 + 専門研修
- ▶ 初期研修 + 専門研修 + 上級研修

初期研修

神経を知らない初学者が、神経を知っている獣医師になる。

【期間】1年間

【目標】教員と共に神経診療を行い、稟告聴取、神経学的検査、臨床推論、MRI検査、CSF検査、検査麻酔の基礎を身につける。

【修了時コンピテンシー】臨床現場でよく出会う神経疾患について、最低限の診断・治療方の知識を持つ。

- ・臨床現場でよく出会う神経症状(てんかん発作、四肢の運動失調/不全麻痺、脳神経障害など)が判別できるようになる
- ・正しい神経学的検査の手技+結果の解釈法(局在推定)が身につく
- ・MRI検査前にある程度妥当な臨床推論を構築できる
- ・MRI読影の基礎が身につく

【対象疾患のイメージ】特発性てんかん、脳炎、脳腫瘍、脳梗塞、IVDD

専門研修

神経を知っている獣医師が、神経を見られる獣医師になる。

【期間】1-2年間

【目標】神経症例の症例数を重ねて、稀少疾患を含めた神経症例の診断を身につける。初期研修への指導を通して基礎を理解する。

【修了時コンピテンシー】適切な指導を受ければ、一人で神経診療を行う事ができる。

- ・MRI検査前に適切な臨床推論を構築できる。
- ・判断に迷う神経症状に対する診断方法、治療に苦慮する場合の治療法の知識が身につく
- ・応用画像を含めたMRI読影が身につく
- ・稀少疾患への取り組み方を知ることができる

【対象疾患のイメージ】薬剤抵抗性てんかん、TIA、不随意運動、大脳膠腫症、重症筋無力症、先天性代謝異常症

上級研修

神経を見られる獣医師が、神経ができる獣医師になる。

【期間】1-2年間

【目標】主体的に神経診療を行い、さらに症例数を重ねる。初期研修、専門研修への指導を通して、理解を深める。

【修了時コンピテンシー】一人で神経診療を行うと共に、神経病を適切に伝えることができる。

- ・自らの力で神経診療を行うことができる
- ・神経病における課題を認識し、解決に対して継続的に取り組むことができる